

茶の湯文化学会会報 No.72

第72号/2012年3月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第三十四回研究会報告

井上 治
八尾 嘉男

「田淵庭園を訪れて」

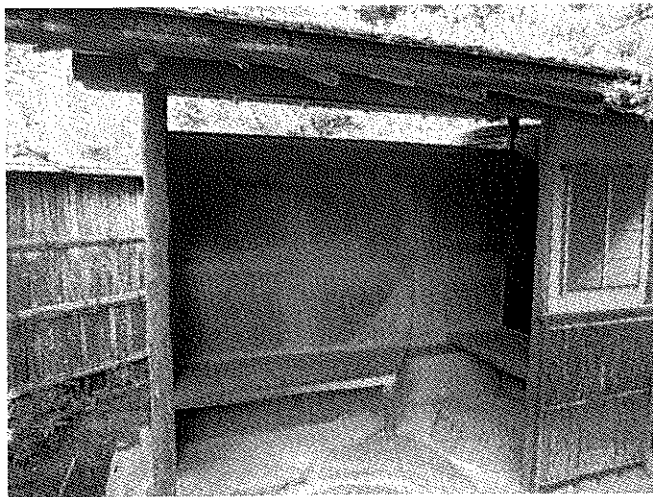
井上 治

平成二十三年十一月二十七日、茶の湯文化学会第三十四回研究会で兵庫県赤穂市の田淵家庭園を訪れました。田淵家は江戸時代には「川口屋」を称して赤穂尾崎村で塩田と塩問屋を営んでいました。寛延元年（一七四八年）四代市兵衛（春元）の時には赤穂藩の蔵元に任命され、この時から「田淵」姓を名乗るようになったそうです。文化文政期（一八〇四年〜一八二九年）には約百六町歩の塩田（石高に換算すると約一万石）を有しており、当時における日本最大の塩田地主でした。

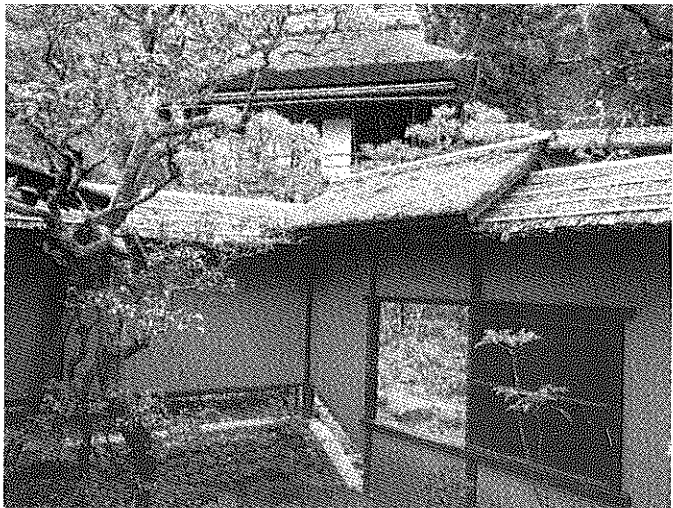
田淵庭園は四代市兵衛から六代九兵衛（政俊）の時代にかけて三崎山麓の傾斜地を利用して作られた庭園で、上段に塩田を一望できる宴席と茶室を備えた「明遠楼」、中段に茶室「春陰齋」、そして麓に赤穂藩主（森家）を迎える上段の間を備えた「書院」を備えています。

田淵家の当主は代々茶の湯をたしなんでおり、特に五代九兵衛（政武）は久田宗参に師事し、明和元年（一七六四年）には宗参に依頼して上記の「春陰齋」

を建てたと言われています。代々の当主が茶をたしなみ順次増築していったこともあり、田淵庭園は様々な特徴を備えた見所の多い庭園となっています。

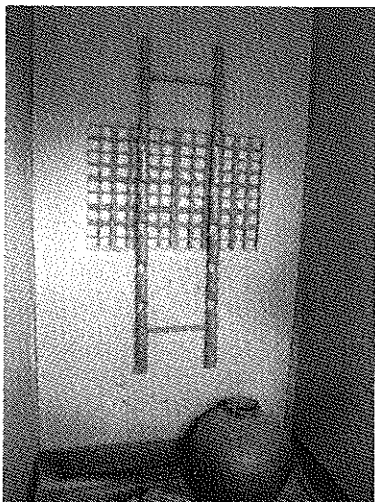


「春陰齋」の腰掛待合。主客と相伴の席が分かれた割腰掛になっています。



「春陰齋」露地の中潜。その向こうに見えるのは庭園上段にある「明遠楼」です。「明遠楼」の扁額は伊藤東涯の書。因みに「春陰齋」の扁額は歌人としても著名な日野資枝の書だそうです。このあたりにも、京都の文化人や公家との密接な関わりが伺えます。

産する塩田を所有し、その生産と問屋業を営み、当初は「川口屋」と称していました。その後、四代・市兵衛（春元）が当主の時代、元文元年（一七四〇）に大庄屋格、寛延元年（一七四八）に赤穂藩の蔵元、藩の蔵屋敷の出納を担当する立場に任命されます。この頃から「田淵」姓を称しだし、江戸時代後期、十九世紀前半には石高換算で一万石に値する塩田を開発、所有した名家です。講演は田淵家の説明に次いで、四代・春元以来、六代・九兵衛（政俊）の頃までに建立・作庭された現在の国指定名勝「田淵氏庭園」の概略が述べられた後、同時に収集が始まったであろう茶道具が紹介されました。茶道具は、家の有力振りを示す婚礼調度などと共に赤穂市立美術工芸館に田淵家から寄贈された資料です。裏千家十二代・又妙斎直叟作茶杓「八重桜」や裏千家十四代・淡々斎碩叟の花押が入った海松貝蒔絵炉縁などがあることから近代に入手した道具も含まれる茶道具の内容は多岐に渡り、味吞先生は花入や香合、水指、茶入、茶碗、茶杓、棗、釜など、時間の許す限り、丁寧に話を展開されました。私の印象に残りましたのは、その数の多さもありませんが、茶室ともリンクする藪内家や表千家といった江



「明遠楼」の刀掛け。この形式のものは松江周辺にも多いとのこと、中村利則先生は北前船による金沢から瀬戸内に至る影響関係を指摘しておられました。

このように見所の多い田淵庭園でしたが、すぐ隣にある赤穂市立美術工芸館（田淵記念館）にも多種多様な茶道具をはじめとして、着物、武具あるいは大石内蔵助ゆかりの品々が保管されており、見応えがありました。

「第三十四回研究会で赤穂を訪れて」

八尾嘉男

今年度の茶の湯文化学会の国内研究会は平成二十三年十一月二十六日と二十七日に兵庫

戸時代の田淵家に諸縁の茶道具と大石良雄や淡路焼など赤穂の地ならではの品々たちでした。翌日、これら道具の一部を田淵家に隣接する赤穂市立美術工芸館の展示で実際に目にする事ができたのは見学会ならではの楽しみでした。その後、煎茶も嗜んでいた可能性にも触れた質問時間があり、一息入れて、中村利則先生の講演が行なわれました。翌日の庭園と建物見学も中村先生解説の下に行なわれたのですが、講演は山を背後にし、壮大な海の眺望が意識されたであろう趣向を明らかにするとところから始まりました。話は道路の拡張により道が閉ざされ、その役目を終えた御成門から表玄関へと至るアプローチ、かつて赤穂藩を治める森家の藩主が田淵家を尋ねた際に通った道や春陰齋、明遠楼という二つの茶室の見所へと展開され、翌日への期待を膨らませた一時となりました。

見学会の話はともに参加した井上治氏にお任せするとして、私の参加記はこれで終えたいと思います。

県赤穂市で開催されました。赤穂と申しますと、昨年、東京の明治大学で行なわれた大会

で中村利則先生が素材の一つにしつつ、ご発表された内容をご記憶の方もいらっしゃるかと思います。全く個人的な話ですが、私はその大会で研究会が赤穂、田淵家を素材に開催予定という話になった時、大学院在学中に「地方の茶の湯で面白いところがあるから、何か研究素材にしてみたらよいよ」と恩師に勧められていた家であったことを思い出し、確か茶道具をたくさんご所蔵で、茶会記が数百回分あると聞いていたと記憶を蘇らせるとともに、そのいつかをまだ実現していない後ろめたさを感じつつ、当日を迎えました。

当日の話に入る前に赤穂の地を少し紹介しますと、赤穂市は忠臣蔵にまつわる史跡ももちろん大きな観光資源なのですが、瀬戸内海から水揚げされる新鮮な魚介類がとりわけ美味なことに加えて温泉地を持つリゾート地でもあります。そして、関東から予約をして足を運ばれる方も多いピッツァの名店もある、勉強以外の魅力にも満ちた市です。

研究会は、最初に赤穂市立美術工芸館の味吞英和先生による講演が行なわれました。田淵家は海水を散布して凝縮することで塩を生



東京例会

（平成二十三年十一月十九日）

「古筆鑑定の心得」

松原 茂

「古筆」とは、本来「古い筆跡」という意味だが、今日茶の湯の世界では、平安鎌倉時代の歌書を中心とした和様の書のことを指して限定的に使うことが多い。古筆鑑賞の高まりのなかで、それらは切断・分割され、古筆切が生まれた。

古筆切は掛物に表装されるか、または手鑑（手鏡とも表記）に貼りこまれて鑑賞された。武野紹鷗が、天文二十四年（一五五五）十月二日の自邸での茶会で、藤原定家の「天ノ原」の色紙を床に掛けたという記事（『今井宗久茶湯日記』）が、古筆切を茶掛として用いた記録上の初出とされる。さらに、これに先立つ文亀三年（一五〇三）九月二十二日、三条西実隆のもとに、牡丹花宵柏が藤原俊成自筆の「歌懸字」（住吉百首の断簡）を持参したという『実隆公記』の記事によって、古筆切を掛物として鑑賞することは、早くも十六世

紀前半には行われていたことが判明する。

一方、手鑑の制作はこれよりやや遅れる。関白豊臣秀次は、加賀前田家の「桂宮本万葉集」(現在、宮内庁蔵)の巻頭と奥書とを手鑑に貼るために召し上げ(中箱蓋裏識語)、また、天正二十年(一五九二)当時は四通あった空海の手紙を継いだ「風信帖」(現在、教王護国寺蔵)のうちの一通をも取り上げている(同奥書)。これらの記録から、桃山時代にはすでに手鑑の制作が好事家の間で始まっていたことが確認でき、慶長八年(一六〇三)に刊行された『日葡辞書』に「teaganji」の項目が採録されたこともそれを裏付ける。

古筆の蒐集と手鑑の流行は江戸時代初期に最盛期を迎えた。『隔莫記』には、後水尾院所持の「御手鏡之古筆」(寛永二十年(一六四三)四月十七日条)や、後西天皇が作った手鑑「拾六帖」(万治元年(一六五八)十二月二十二日条)などの記事が見え、『きのうふはけふの物語』(元和寛永初期の成立)や、井原西鶴の『好色一代男』(天和二年(一六八二)刊)・『日本永代蔵』(貞享五年(一六八八)刊)には、古筆の収集や手鑑の流行が町人の世界にまで及んでいたことをうかがわせる記述がある。また、手鑑のさらなる普及

に一役買ったのが、慶安四年(一六五二)刊行の『御手鑑』(『慶安手鑑』と通称される木版本)であった。

古筆切愛好の波に乗じて、古筆の鑑定を専業とする古筆見あるいは古筆目利とよばれる職種が誕生した。古筆了佐(一五七二〜一六六二)を初代とする古筆家の代々と門人たちがその中心を占める。

古筆目利の拠り所とすべき参考書は、古筆見の各家で備えられた。それら秘蔵の伝書をたずねもとめて、浪華陶々居なる人物が編纂したのが『古筆名集』(袖珍本一冊)である。文化元年(一八〇四)版を皮切りに、同五年、文政七年(一八一〇)、同十一年、安政二年(一八五五)、増補版が同五年、明治十八年(一八八五)と、七回も刊行された。増補版の凡例に、古筆鑑定の心得が記されている。「目利稽古ハ、先ヅ紙ノ時代ヲ見、次ニ流儀ヲ分ケ、次ニ筆力ノ位ヲ察シ、誰ト定ムル也。古筆ノ数ハ限り有マシケレ共、先ヅ凡ニ流儀ヲ分ケレバ五十余流トナル。其中ノ一流ノ位ノ高下、時代ヲ弁別シ、一人ヲ撰ムコト也。此法ニヨラザレバ、彼是混雜シテ分ガタシ」といい、「真偽ヲ見極ルコトハ至テ六ヶ鋪コトナリ。然レ共、真贋ヲ能ク見覺ユ

をおいて考えてきた。

わび茶の本意を表すとされる『南方録』『覚書』に、わび茶の本意を次のように表している。

「小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修行得道する事也。家居の結構、食事の珍味を棄とするは俗世のことなり、家は漏らぬほど、食事は飢えぬほどにてたる事也、是仏の教え、茶の湯の本意なり、水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく、みなみな仏祖の行ひのあとを学ぶ也。」

ここで見れば、茶の湯の本意は、家は漏らぬほど、食事は飢えぬほどにて足るといふ生きたる姿勢である。そしてその学びは、「水を運び、・・・」という「仏祖の行ひのあとを学ぶ」ということである。まずこの「仏祖の行ひのあとを学ぶ」とはどういうことかということから、まず清規の成立、そして最初の百丈清規の中にその意味を探った。そして特に道元は、清規を修行の重要なこととして捉え、実際の道場で清規がいかに実践されるかに力を尽くした。この道元の清規について見てきた。その上でここでは、道場で清規を護ること、即ち「日常生活の行いを型、規範として

学ぶ」ことがどういうことを考える。

道元は『正法眼蔵』において「修証は即ち無きにあらず、染汚すれば得ず」と述べている。何かの為に私たちは修行をしがちである。しかしそれでは既にはからいをしていないことになる。何かの為にやるのだからいかか判断をして行うことになる。坐禅は、そのはからいのない姿である。只座るのである。といってそれ以外の日常生活の行いも、同じようにはからいのない生き方でなくてはならない。そうでなければならぬ。「平常心是道」なのである。坐禅にもその道場のやり方があるように、その生活の行いもその様式がある。師に随身して、諸祖の行われてきた行いを、身心共に同じようにすることが行であり、そこに仏祖の行いが実現されているという。その行いは諸祖も同じようにされてきた行いであり、自分が今ここでその行いをする中で、そこに、諸祖も続けてこられた仏の大道が通達するというのである。そしてその行の功德が自分の行いを支えるという。私たちの存在が他との係りによってあることを示している。これは仏の教えである。人間存在の本質である。自分の行いが他との係りを創りだしているのである。それだけに自分の日々

ル時ハ自然ニ偽筆ハ知レル者也」という。これらは、方法論としては、今日の古筆研究においても有効であるが、その精度を上げるためには、文献からの裏付けや、仮名の字母使用頻度の調査など、さらに多角的なアプローチが必要であることはいままでもない。

近畿例会

(平成二十三年十月一日)

「日常生活の行いを型として学ぶこと」

杉谷朱美

お稽古をしていて感じてきたこと、それはわび茶とは何だろうということである。何を学び、何を伝えていくのか。茶道の型は日常生活様式と同じではないが、茶をもてなし、頂くという行為は、日常茶飯の行為である。それだけに、型を覚えてしまうと普段にお茶を頂くことその意識は普段と変わらないように思える。稽古でその人自身の意識が変わっているのだろうか疑問に感じてきた。学校という場は子供たちの人間形成の場であるとすれば、学校での茶道の意味はどこにあるのか。型をならうという茶道の稽古が、きわめて日常生活の行いに近いことを型とすることに、何か意味があるのかというところに視点

の行いが重要であると道元は強く説いている。ひとつひとつの自分の行いがいかに重たいものであるかを示している。

そのならうべき行いとは、どういう行いであるのか。そしてその型を学ぶとはどういうことか。ならうべき行いとははからいのない行いである。その具体的な行い、生活様式を示したのが清規である。道元はいくつかの清規を示しているが、『正法眼蔵』に「洗浄」の項目を示している。それは長爪の戒めや、大小便の用の足し方である。しかし考えてみれば、あまりに日常のことでこんな些細なことと思うことであるが、この行為は人にとっでははずすことのできない行為である。自分という存在の本質について常に向き合う姿でもある。こういうところまでその仏の行いにならわなくては、仏の生き方をならうことにはならないということである。それはまたはからいをしない生き方であり、その根拠には仏の教えがある。仏の行いをならうことで、仏の教えを身に現し、自分を省み、自己の本来にむきあい、仏の教えを、そして仏の生きる姿を自分のものとしていくということである。

また『典座教訓』を見てみると、それは「典

座の仕事」を細かく述べ、「仕事の手順、食器類の整理」と実際の行いについて細かく示しているが、必ずそこに心構えを述べている。それに加えてまた「心の用い方」とか「心構え」について項目をとって説いている。実際の普段の行いに現さなくては実証できない。しかしただ同じように行いをしたからといっても、それは形だけに陥ってしまう。そこに心を使い身を以て行っていく。行いをただ真似るだけでは形ばかりになる。そこに心を用いてひとつひとつの行いを「眼精を以て」ゆるがせにしないで行っていくことを説いたのである。しつこいくらいに細かい行いを示し、そこにその心の使いかたを示したのは、多くの乱れた道場の現実を見てきたからだろうか。学校に茶道教育を実践してきた奥田正造は、『南方録』を本にして、茶道の稽古によって、子供たちが「建物や器物に苦勞するよりは隨処に境を開くわが心をねり、わが身そのものをこの中に働く道器とする」ことを願い、実践してきた人物である。「滅後」に利休が、「大徳・南宗の和尚たちに一向問取し、禅林の清規を本として」とあることをあげ、奥田自身そのことを実行したように思われる。茶道において「日常生活の行いの型を学ぶ」ことは、

仏祖の生き方をならうことと考えていた。清規については道元の教えを以て稽古の実践を進めたように思われる。ひとつひとつの行いを「凡眼を以てすること莫れ、凡情を以て念うこと莫れ」という道元の言葉を示しながら、子供たちに実践させている様子が、学校の日誌や卒業生の記録等からも、奥田自身の記録からも窺える。成蹊女学校の創立者である中村春二は、子供たちの心の奥に入った人間の根本教育を目指したが、中村もまた、教師も生徒もただ、教育法や教育論を研究するばかりで心構えだけを言われても、実際に心の用い方を練習しなくては、心の奥に入り込んだ実際の教育はできないと「凝念法」を自ら作って実践させている。形を真似るだけでは、稽古の意味はないが、心構えだけでも、その生き方はならえないのである。それを型として、実際の行いを以て実践することしかならうことができないことと中村も感じていた。

奥田・中村の学校の方針は少欲生活であった。それは「家は漏らぬほど・・・」の姿勢である。その姿勢を日々の生活に実行させた。ということは、道元が言うように仏の生き方を、自分の生活として体験していることである。そして奥田の稽古は、まず感じる心を養

うように、小室での稽古、音に特化した稽古、点前は簡単な薄茶の点前の稽古である。簡素な中にこそささやかなところにも感じる心は生まれるのである。そして毎日の掃除を、奥田自身も一緒にを行い、その中で、何に気を付けるのかを示し、工夫はたらきができるようにひとつひとつをゆるがせにしないことを実践させている。ガス・水道という便利な物を使わなかった。便利な物を使えば、ないとそれが不満になるが、不便な中にあればどうすればよいかと云う工夫はたらきを覚えるのである。このような普段の実践によって身に頭れてくる自己の姿を目指し、自分のはたきによって生み出せる趣を目指すことを示して、日々の稽古に実行させた。奥田は「平常心是道」について何度も考えていたことが、奥田の「茶道案」に窺える。些細なことをひとつひとつの行いをゆるがせにしない稽古がいかに大事であり、難しいかを知っていた。些細なことまでも大事に心をかけて行うことは、自分の生活の仕方、生き方、心身を以て練ることである。心を使い、身体をいかにはたらかせるか、これは生き方をならうことである。こうして日常生活に近い茶道のお稽古の中で、ならうべき姿を体験し、自己を省み、

自分の人間としての本来に触れ、自分の行いに向き合い、あらため、考え、自分のものにしていくことである。このように心身を練っていく中で、奥田は感じる心、利く眼、はたらく身体を養い、どんな苦境にあつても、隨処に道を切り開き、実意を以て生きていくことのできる自己の形成を目指したのである。

(平成二十四年一月二十一日)

「大燈国師墨蹟について」

宮武慶之

個人蔵の大燈国師墨蹟「一帆風」(断簡)は、師の大応国師がその師である虚堂智愚以下、同胞の尊宿らから日本へ帰国の際に贈られた詩篇である。「一帆風」を大燈国師により書き写したものである。

本墨蹟には新井白石、大心義統、東海寺和尚らの添状が付属しており、当時の所蔵者は堺の両替商・谷安殿である。後に本墨蹟は安殿によって堺・祥雲寺に寄進されたと考えられる。これまでの発表者の調査により本墨蹟の断簡部分と考えられる大燈国師墨蹟二件を売立目録中から提示し、添状に記載される三幅の存在と一致することを明らかにした。本発表では「一帆風」と所蔵家および関係

する寺院への寄進が共通する大燈国師墨蹟を検討することにより、所蔵家の多くが豪商であった点からその関係を紹介した。江戸・冬木家(材木)の所蔵した風墨蹟(重要文化財。九州国立博物館所蔵)を冬木弥平次が京・雲林院へ寄進した例。京・後藤家(呉服)の所蔵した書簡(大徳寺所蔵)を後藤縫殿介により京・大徳寺への寄進した例。またその他、茶屋四郎次郎家(呉服)に関し、画像資料として江戸宗玩「墨蹟之写」から提示し、鴻池家(両替)所蔵の墨蹟は売立目録中の画像より紹介した。

豪商が所蔵していた大燈国師墨蹟は、その所蔵家と縁故のある禅宗寺院へ寄進する例が三例あることがわかった。その受容の背景には茶の湯文化での評価の高さとともに、宗教的な信仰の側面があることがわかった。

静岡例会

(平成二十三年九月二十五日)

「日本煎茶史概観」

松阪富美子

日本煎茶史を概観する為に、「煎茶」という語を取りあげる。中国語では「煎」(こと)「茶」という語義のみである。日本では平

安時代に中国語をそのまま導入し漢詩漢文に用いた。喫茶法においても中国に準じたものであったと推測される。その後「煎茶」は日本において様々な意味を持つようになった。今日の「煎茶」は、茶葉の形状(粉茶である抹茶に対する葉茶)・葉茶の種類(茎茶・玉露に対して・あるいはこれらの総称)・喫茶法(湯に浸す淹茶法に対して火に掛けて煮出す方をいう・あるいはこれらの総称)・日本文化の一分野(文人煎茶趣味、煎茶道とも)など、実に豊かな多義性を示している。このような「煎茶」の日本独自の発展が認められるのは十六世紀の後半からで、下層の人々が煮出して飲み、「せんじ茶」と呼ばれていたことが宣教師によって報告されている。十七世紀になると葉茶そのものを「煎茶(せんじちゃ)」と称するようになり、釜や土鍋で煮出していた。これら庶民の茶とは別に、長崎唐人貿易や隠元禪師ら黄檗僧により明末清初の文化が将来され、喫茶が詩書画とともに楽しむ文人趣味の一つとして売茶翁を初めとする知識人の間に広まっていく。十八世紀の前半、宇治で青製が発明されると従来のものと區別して「上煎茶(じょうせんぢや)」と呼ばれるようになった。このような葉茶の改良

が急須を用いて淹茶法で喫するその後の煎茶文化の普及につながったと考えられる。

「急成長する中国茶産業と茶文化」

小泊重洋

最近、中国の社会経済の発展は目覚ましいが茶産業も例外ではない。現在中国の茶は面積、生産量ともに世界一で、とくに二〇〇〇年以降の伸びが著しい。作られている茶種は圧倒的に緑茶が多い。かつて最も生産量の多い省は浙江省であったが、現在は福建省が最多で、次いで雲南省、浙江省の順である。この三省はそれぞれ特徴がある。浙江省は主に緑茶を生産し、茶園は広大である。中国では贈答品の比重が高い。勢い高級ブランド化と豪華な包装が競われ、名茶の価格は高騰し、形状や色などの外観重視の傾向が強い。宣伝母体として各地に茶文化促進会が作られ活発な活動を行っている。乱立気味の茶芸館は特徴を競っている。烏龍茶産地として名高い福建省は山間傾斜地茶園が多く、小面積で特徴のある茶を作っている。最近消費動向に敏感に反応し、鉄観音茶は清香タイプが大部分を占めるようになった。機械化や大規模化もすすみ茶企業の進出も目覚ましい。雲南省で

は普洱茶が知られ、特に餅茶は投機の対象にもなり急速に高騰した。しかし、二〇〇七年をピークにバブルが崩壊し、二〇〇八年には価格が三分の一に急落し、多くの中小茶企業が破たんした。以後、大手茶企業や行政の援助で高級化路線と効能研究に力を入れ、短期間に回復しつつある。各都市にある茶市場では多種多様な茶が販売され、杭州市や福建省、四川省等には大規模な茶博物館があり、茶学部を持つ大学では茶文化の研究にも力を入れるようになってきている。茶に関する出版物も多い。

(平成二十四年一月二十八日)

「竹川竹斎と静岡」

岩田澄子

竹川竹斎は伊勢の豪商で、江戸店の客だった農政学者の佐藤信淵に学び、地元の伊勢射和で茶栽培を奨励し、製茶工場建設や茶の輸出を手がけていた。

慶応二年、竹斎は勘定奉行の小栗上野介に招聘され、江戸に約四ヶ月滞在した。その際、幕臣の大久保一翁に桑や茶の栽培書執筆を頼まれ、帰宅後すぐに『蚕茶楮書』を著すと、翌三年に一翁により印刷・出版された。

さて、静岡・牧之原台地は現在日本最大の茶の生産地であるが、その開拓は明治二年に始まる。開拓を遂行したのは、徳川家達に随行して駿河に入植した武士(精銳隊、後に新番組と改名)で、これまで主に組頭の中條景昭や、山岡鉄舟・勝海舟が功労者として注目されてきた。

だが、大久保一翁も江戸城無血開城に尽力した主要人物で、中老として駿府入りし、牧之原開拓が始まる明治二年には静岡藩権大参事として活躍していた。また、勝海舟は幕臣になる以前から竹斎と親交していた。

これまで、三重県の竹斎研究では一翁と静岡の関係が意識されず、静岡県の牧之原研究では『蚕茶楮書』の存在が知られていなかった。だが、牧之原で竹斎の栽培書が使われた可能性は十分に考えられる。

静岡の茶業の歴史は古い。一方、元士族が担当した牧之原は荒地で、開拓は当初厳しい状況が続いた。だが、今日の発展の基礎となった当時の状況を明らかにすることは意味がある。

「竹斎と静岡」は近年浮上した新しいテーマで、牧之原で竹斎のテキストが実際に使われたのか(資料の所在確認)、栽培書として

の客観的評価など、今後の課題は多い。是非静岡の皆様にご教示を仰ぎたい。

「江戸時代の静岡茶の歴史」

中村羊一郎

聖一国師(一七〇二-一七八〇)が、一七四一年、帰国に際して中国から持ち帰った茶の種を足久保にまいたという伝説は、その地の茶名を高めた。十四、五世紀、県下各地で茶が作られ飲まれていた史料も見られる。家康が駿河に関わっていた時代、山間部から茶を年貢として徴収していたが、上質の碾茶に近いものを作っていたと思われる。但し、駿府城内の茶会などで使われたのは、やはり宇治の茶であつたらしい。足久保の茶が、將軍家の御用茶となつたことで、江戸時代には、阿部(安倍)茶、足久保茶、駿河茶が江戸市中で他産地の追随を許さぬブランドであつた。天明七年の茶問屋の資料からも、当時、「煎じ茶」としては、これらの静岡茶が高く評価されていたことがわかる。このような強いブランド力を持った「安倍茶」「駿河茶」「足久保茶」の名称を捨ててしまったのは静岡の茶にとって惜しまれる。十八世紀末から、静岡においても番茶から蒸製の煎茶(青製)へと

切り替えられ、茶が山間地農家の生活基盤となった。しかし、江戸の間屋と結託した地元間屋の圧力によって流通が阻害されたので、大規模な訴訟を起こし、その結果、流通の自由化を勝ち取った駿河・遠江の茶農家は、横浜開港と共に横浜に茶を持ち込んで、外商に売り込みを図り、維新後の対米貿易の主役として静岡茶は大きな地歩を築くことになる。



東京例会

四月十四日(土) (会場:未定 午後二時)

「錫縁香合の形状と蒔絵について」

竹内奈美子氏

「武道と茶道(仮)」

岡本浩一氏

※会場が決まり次第、ホームページにてお知らせします

五月十二日(土) (会場:国士館大学 午後二時)

「(未定)」

古川紗弥香氏

「(未定)」

福島 修氏

七月十四日(土) (会場:未定 午後二時)

「中世前期の茶の生産・流通・消費」

矢野 環氏

「儀式と法会を中心に」

永井 晋氏

九月八日(土) (会場:根津美術館 午後二時)

「茶の湯の南宋青磁」

西田宏子氏

「薩摩焼(仮)」

松村真希子氏

十一月十七日(土) (会場:未定 午後二時)

「天下一宗四郎について」

鈴木裕子氏

一月十九日(土) (会場:未定 午後二時)

「中国の酥乳茶文化(仮)」

祁 氏

「西洋人の見た茶の湯(仮)」

谷村玲子氏

「南蛮文化と茶の湯(仮)」

宇野千代子氏

四月十四日(土) (会場:名古屋文化短期大学 午後二時)

「名物記でたどる『宝物』から『名人』時代への推移」

竹内順一氏

「羽箒の変遷と茶人の好み―特に近代数寄者の名古屋の羽箒について―」

下坂玉起氏

九月二十九日(土) (会場:未定)

「(未定)」

十一月二十四日(土)

「紹鷗所持白天目の復元について(仮)」

青山双男氏

軽食茶事 席主 柏井武氏

(十三時〜十六時 会費千円)

矢部良明著 宮帯出版

(定価三九九〇円税込)

近畿例会

五月十九日(土) (会場:宝塚大学)

大阪梅田キャンパス 午後二時〜

鼎談「不易と流行」変わるものと変わらな

いものー」

倉澤行洋氏・谷晃氏・影山純夫氏

十二月九日(日)

(茶の湯関係文献を読み所感の発表)

(発表者未定)

茶事 席主未定(十二時〜十六時)

二月十日(日)

「石州流三百ヶ条不白答(中) 常用文」

柏井 武氏

北陸例会

三月二十四日(土) (会場:文化の館)

〔鯖江市図書館〕会議室2 午後二時〜

「福井県近代和風建築調査から」

千木良礼子氏

文化の館 福井県鯖江市水落二丁目二五

―二八 電話〇七七八―五二―〇〇八九

一般の方々が茶の湯に親しんでもらうため
の茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時〜十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

(会費三百円)

高知例会 (会場 高知県立文学館慶雲庵茶室)

午前十時〜

七月一日(日)

「茶の湯文化学会平成二十四年度大会の

研究発表をテーマとしたシンポジウム」

発表者未定

お知らせ

*新刊紹介

『エピソードで綴る茶入物語 歴史・

分類と美学』

豊富な図版と詳細な解説によって茶入

の魅力に迫る一冊。